

第三回派遣 10月27日～10月28日

『仙台レポート』

大泉学園本店 店長 濱田 幸太郎



十月二十七日～二十八の二日間、宮城県の被災地視察と多賀城市の八幡公民館でのカットボランティア、八幡神社の清掃作業をさせて頂きました。震災から約七ヶ月たった十月二十七日の朝はとても冷え込んでいました。今回三回目のボランティア派遣には、小河社長と伊藤朋生さんの三人で仙台の被災地へ向かう事になりました。今回このボランティアに参加した目的は、あの震災を過去のモノとし、他人事のよう

に考え生活をしている自分…。当たり前のように働ける職場、帰る家があるという幸せを何とも思っていない自分を変えるきっかけになれば良いと、大変不謹慎ですが、自分都合の思いが大半を占めていました。半分旅行気分のまま大泉を出発した僕は、このあと人生観を変える衝撃の事実に向面します。車を走らせ途中福島県のあるサービスイリアで休憩を取った時、トイレの窓からブルーシートに家の側面を被っている一軒家を見かけました。僕が初めて震災の被害を目のあたりにした瞬間でした。これから先にある宮城県は一体どうなっているのだろうか？そんな少し緊張している自分を感じながら宮城県に向かいました。宮城に近づくにつれ数台のパトカーとすれ違いましたが、愛知県警と書かれている車、長野、埼玉県警のパトカーも数台見かけました。小河社長が言っていました、警官の方々は休日を返上して被災地に来て交通整備等のボランティアに来ているのだそうです。宮城県の警察署も被災されて人手も大分不足しているのでしょうか…。頭が下がります。そして自分都合で参加している自分が情けなく感じました。

僕達が最初に視察したのは南三陸市です。初めての土地なので、何処に海があるのかもわかりませんでした。車を走らせて行

くうち、少しずつ瓦礫らしき物が散らばっている事に気付く緊張が高まってきました。でもそこは海から大分離れている、という事を知るのもう少し後の事でした。津波に飲まれ塩害でやられ茶色く変色してしまっている森林、ミニカーの様にひっくり返っている数台の車、以前は鉄道が走っていたであろう、崩れて足しか残っていない鉄道の橋、高いコンクリートの壁には何がぶつかり引きずって出来たであろう引掻き傷のような爪跡…。第一回目の中川さん、二回目の小黒さんが視察に行った時の写真は見ていたのですが、実際自分の目で確認すると言葉も出ませんでした。町が無



(10) 第三回派遣 10月27日～10月28日



い：人が全くいない…。戦場の後つていうのはきつとこんな光景なんだろう…。民家は一軒も無く、頑丈に鉄骨で建てられた工場、病院、デパート、観光ホテルのような頑丈な建物以外は全て残っていませんでした。もちろんその頑丈な建物さえも窓は全部割れて中はメチャクチャ：デパートの中には車も数台転がっていました。瓦礫が散乱しとても中に入れる状態ではありません。そばにあつた病院の入口は綺麗に瓦礫は撤去されていましたが、正面入口には沢山の花束や縫ぐるみ、手紙やお菓子、飲料がそなえてあり、ここで老若男女問わず沢山の人が亡くなった事を知りました。



南三陸町を視察後、もう少し北側の気仙沼に言ってみる事になりました。小河社長もまだ行つたことが無いらしく、被害状況も全くわからないのですが、北へ車を走らせました。テレビ、ラジオ、新聞では伝わってこない現実を目の当りにした、僕と伊藤さんは移動中言葉がほとんど出ません。そんな中、目に飛び込んできたのは現地の人達が作った「全世界の皆さんありがとう」と書かれた大きくカラフルな看板や、「一分一秒からでもボランティアの方を募集します」とダンボールの切れ端で書かれた看板でした。僕は心を揺さぶられました。伊藤さんもきつと同じような気持ちだつたと思います。



気仙沼市に入り少しづつ瓦礫が転がっているのを感じました。大手ショッピングモールが見えてきて、一度上り坂になってから下りにはいるのですが、ここは営業されていましたが、隣接しているスーパース社は硝子窓が全て割れて営業再開できていませんでした。大手企業は資金があり、すぐに営業再開に向けて行動出来たのでしよう。その後、何軒かA社のスーパースを見かけましたが、どこも手つかずの状態…。資金、内部留保が無いことが分つたような気がします。そんな工場、企業をこの後、嫌と言う程見ることになるのは、この時夢にもおもっていませんでした。ショッピングモールのあつたその坂を下りきつた辺りから景色が一変しました！南三陸町より酷い光景が目の前に広がっています。商店街はほぼ全滅、店舗をよく見ると「違う場所で営業しています」と連絡先が書かれた貼紙が所々店舗らしき建物に貼られています。また「旗を立てて営業しています」とアピールしているお店もありました。こんな状況の中頑張っている姿に胸があつくありませんでした。信号の無い交差点には警官が防護マスクを付けて手信号で車を誘導しています。津波でアスファルトが全て剥がれてしまい、デコボコの悪路で水溜まりも沢山あります。車が通る度にももの凄い土煙が

たっています。その中での車の誘導している警官の姿が各交差点で見られました。

いっぽう、気仙沼湾は南三陸町と違いボランティアの姿は見受けられません。おそらくまだ一般の方々が入れる状態ではなく、ようやく道路にあつた瓦礫を撤去し、砂利をひいてプロの作業員の人達が建物を解体し始めている…そんな状態に感じました。

気仙沼は漁業が盛んで市場や食品加工会社が多かつたんでしょうね？大きな工場らしき建物が半壊しているのを何軒も見かけました。途中で車から降り写真を撮っていた時、異臭に気づきます。初めて嗅ぐ潮の香りとヘドロと工業油の混ざつたような酷い悪臭。雨が降つたわけでもないのに所々地下から水が吹き出して水溜まりになっています。水の中には小魚に混じつて、ボウフラがウジャウジャいました。立替えられた電柱は道の端に山積みになっています。その少し横には仮設の水道管でしょうか？

この辺もまだライフラインは復旧していません。土に埋まっていな剥き出しの水道管をはじめとしました。工場地帯を離れ、とある小学校に立ち寄ってみました。学校の一階の窓、扉には全てコンパネが打ちつけてあり誰も中に入れる状態ではありません。学校は閉鎖されており校庭には数百台の走れなくなつた車が三重、四重と積

み上げられています。僕も小学生の息子がいるので何とも言えない感情が込められています。学校のすぐ脇に一軒の理容室がありました。サインポールを回し通常営業されてる様子で何故か僕も嬉しくなりました！覗いてみたのですがやめておきました。心の中で「頑張つて下さいっ！応援して下さいます！」と、その場を離れ石巻を指し南下しました。

石巻の印象は何も無い中、門脇小学校がポツンと立っていて、隣に無惨に横倒しになつている墓地があつたのを今でも覚えています。地震の後、火災があつたのか？校舎右半面は黒く煤けており、割れた窓硝子の他にドロドロに溶けている窓硝子が確認できました。職員室は机やテレビ、コピー機がひっくり返り、何をどうやったらこんなになるのか？見当も付かない位グチャグチャです。教室を覗くと片方だけの上履き、教室の後方に置かれたままのランドセルや教科書が見えました。子供達の悲鳴が聞こえてきそうです。怖かつたでしょうね…。私達の他にも校舎を見に来ている方が数名いました。花束を供え、手を合わせています。ご家族のかたでしょう。僕達も校舎に手を合せその場を離れ、今夜宿泊させて頂く日の丸ディスプレイ新崎社長のマンションがある、多賀城市へ向かいました。

多賀城市は仙台に次いで二番目栄えている中心街だそうです。今回の震災で仙台湾には七メートルを超える津波が発生し、市内には二〜四メートルの津波が押し寄せたそうです。地域の約33%が津波に飲まれ、今回僕達が宿泊させていたたくマンションも、1階部分全て水に浸かつてしまったと新崎社長から伺いました。周辺の建物の壁や窓硝子にはここまで水が来た事を物語るように、くつきりとその痕が残されています。新崎社長のマンションの6階に今も住んでいる一つの家族の話をしてくださいました。津波が押し寄せて来た時、Bさん達は急いで車で逃げようとした。家族全員を乗せた時、津波に飲まれ車が水に浮いてしまし操作が全く効かない状態の車…。国道をパカパカ浮いて一つの民家で奇跡的に止まったのだそうです。2階から住民のAさんが手を差し伸べてくれ、Bさん達はサンルーフから全員無事に脱出し、水が引くまでの間、2〜3日Aさんの家でお世話になつたそうです。今、Aさんの家は取り壊され何も無い更地です。今後建て替えるか？引越すのかはわかりませんが、今、Aさんの家族達はBさんのマンションに移住させてもらい2世帯の共同生活を送りながら暮らしているそうです。「助け合い」の域を超越しています。命の恩人でもあり、

(12) 第三回派遣 10月27日～10月28日

酷しい震災を乗り越えていく、家族を超えた同志なんですよ。多賀城はこんな光景があつちこつちで見受けられるそうです。素晴らしいです！感動しました！

翌日、ボランティア活動の為、八幡公民館へ行き、老人クラブ「八幡福寿会」の御爺ちゃん御婆ちゃんのカットをさせていただきました。八幡公民館は30坪程の建物。

震災時は二百名以上の被災者が避難をされたそうです。一枚の毛布を十人で使用し寒さを凌いだのだそうです。壮絶です。老人クラブの小原会長の挨拶の後、約一五名程の御客様をカットさせていただきました。仙台の方と直接話を聞くまと無い機会だったので、正直聞きづらかったのですが、思い切つて震災の時の話を聞いてみました。

一人の男性の話をさせていただきます。Aさんは震災の当日、旅行で福岡にいたそうです。テレビで仙台の事を知り急いで帰ろうとしたのですが、交通手段が無い。知人に電話をかけてもつながらない。どうにかこうにか仙台に戻れたのは四月に入ってからだったそうです。多賀城につき言葉もでない悲惨な光景。恐る恐る自宅に戻り、玄関を開けたところ、部屋はメチャクチャ。「洗濯機で部屋を掻き回したようだった」と語っていました。八畳程の小さ

な部屋に一步も入れない状態。少しづつ瓦礫を片付け、ようやく最近床下を張替えたそうです。床をはがした時、まだ海水で地面が湿っていたそうです。半年以上たった今でも床下が海水で湿っている事で、震災の凄まじさを改めて痛感したそうです。今は避難所ではなく親戚の御宅でお世話になっていそうですが、一日も早く自分の家に帰りたいと話してくれました。帰り際、本当にありがとうございました！サッパリしました。と、Aさんは満面の笑顔で喜んでくれました。普段の業務と何かが違い、人の役に立つ事の喜びを心の底から感じさせて頂きました。福寿会の皆さん、



理容師として、一人の人間として初心に戻らせて頂き本当に有難うございました。震災から七ヶ月たった今も、被災地は悲惨な状況です。最近では、テレビ、ラジオ等のメディアから取り上げられる事も少なくなり、僕もそうでしたが過去の出来事として風化しつつあります。東京に帰ってから僕にできる事は何か？自分の目で見てきたこと、聞いたこと、感じたことを社員さんや家族、御客様に伝え一人でも多くの方に被災地の現状を知ってもらおう。宮城の良いところを伝えて一人でも多くの方に宮城に興味を持ってもらおう様、伝えていく事だと感じました。現地の人達は忘れられることを恐れています。現地に足を運ばないとわからない事や、知らない事が沢山あります。ただ見に行くだけでも良いんです。是非一人でも多くの方に被災地に足を運んで頂きたいと感じています。今回このボランティアに参加させて頂く事ができ、本当に感謝しています。小河社長を始め留守中店舗を支えてくれたスタッフの皆さん。忙しい中ボランティア活動のコーディネートをして頂いた新崎社長、温かく迎えてくれた宮城県の皆さん本当にありがとうございました。一日も早い復興と、被災された皆さんの幸せを心より願っています。ありがとうございました。